

防木ジャーナル

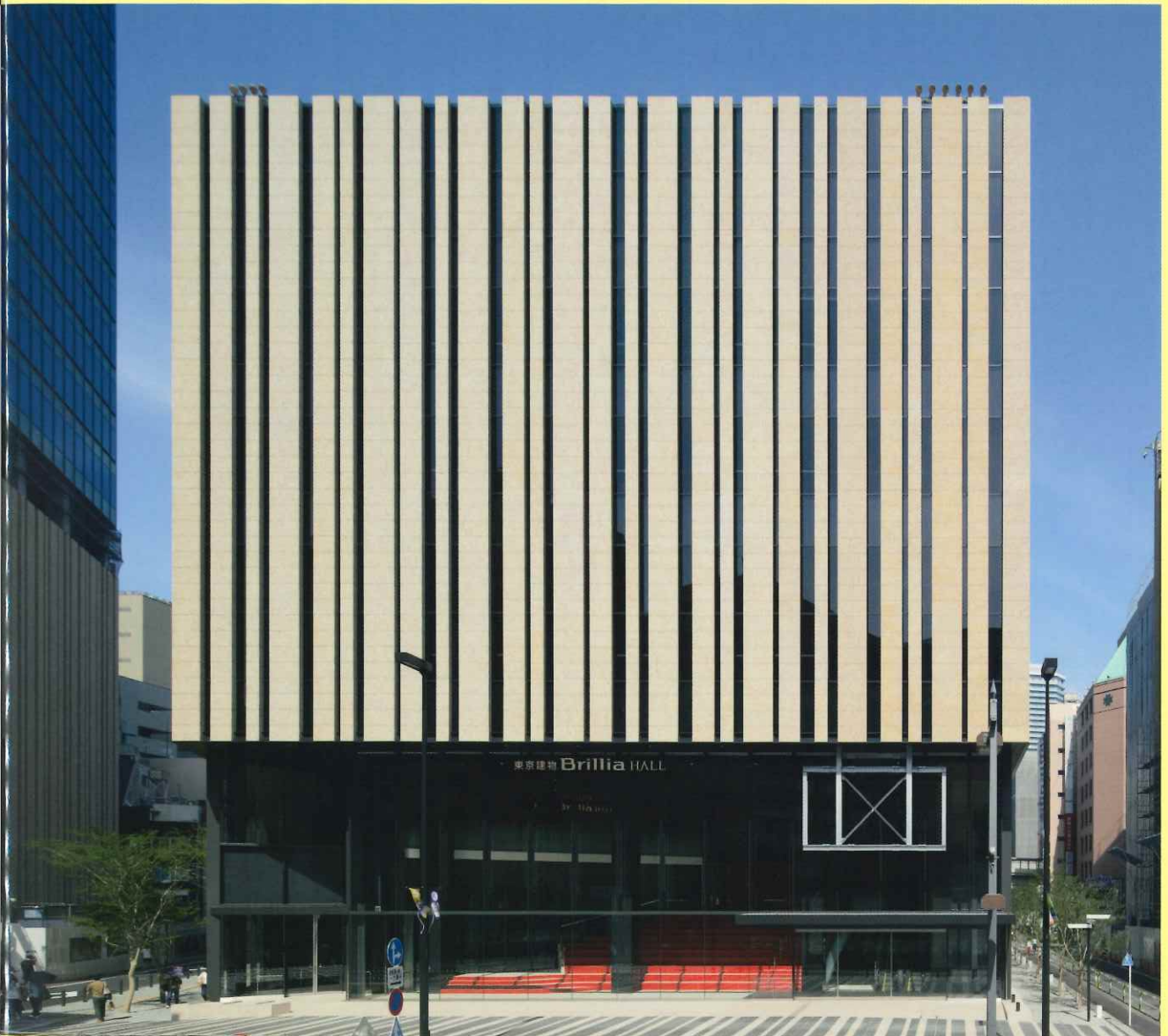
THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

8

2019

No.573



- 火を使わないアスファルト防水
- アクリルゴム系塗膜防水の可能性

横目地に設けた厄介な壁つなぎ

鈴木 哲夫

今回のケースは、鉄骨ALCパネル造タイル張りの建物で、外壁からの漏水が続いていた。外見上は、雨水の侵入口になるような目立った異常はなかったが、ALCパネル間の横目地を注意深く観察すると、ほぼ等間隔に一般部とは微妙

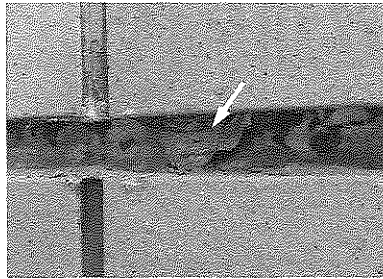


写真1 ALCパネルの横目地シーリングに口開きがある補修部 (矢印)

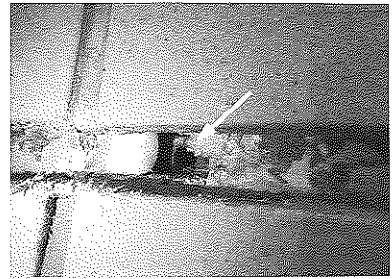


写真2 横目地補修部の錆びた壁つなぎアンカー (矢印)

に異なるシーリングの補修らしき跡があったので、シーリングを撤去することにした。

表面のシーリングの厚さは、タイル厚さ程度で、シーリングの下に張付けモルタルがあり、それを撤去するとALCパネル間の捨てシーリングが現れた。写真1のように、ALCパネルの捨てシーリングにもシーリングの補修跡があった。このシーリングは口開き認められ、撤去すると中に壁つなぎアンカーが残っており、写真2のように錆と汚損があった。

足場の壁つなぎは、図1のようにパネル間目地の横目地部分に設置することが多い。アンカー周りは、足場を解体するまでALCパネルの捨てシーリング、および外壁仕上げ面のシーリングがともに施工できない部分で、本来は足場の撤去時に合番で処理されるはずだが、追われるように作業を進めるために、重要な部分であっても表面的な処理になりがちである。そのため、アンカーを残して壁つなぎの抜取り穴があっても、プライマーを塗って乾燥を待つ時間がないので、塗らずにシーリングを打ち込んでいるのではないだろうか。シーリングの

接着不良になるばかりか、奥までしっかりとシーリング材で詰めるためには、繊細な手順と作業が必要であり、確実に処理できるとは考えにくい。

このような状態になると、図2のようにALCパネルの捨てシーリング裏のバッカー挿入部や、パネル間の隙間に雨水がたどり着くことになり、浸透した雨水が最下階まで流下する。鉄骨ALCパネル造では、壁つなぎ周りの合番補修処理が丁寧に行われていないと漏水ルートになるので、水密の重要な部分であるALCパネル間の横目地に、壁つなぎを設けるべきではないのである。

ALCパネルの外壁から漏水が生じた場合は、まず横目地に壁つなぎアンカーが隠れていないかをまず確認し、合番補修状態の適否を判断する必要がある。止水の観点で考えれば、そもそもシーリングに頼る納まり自体が問題だと言える。

(有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役

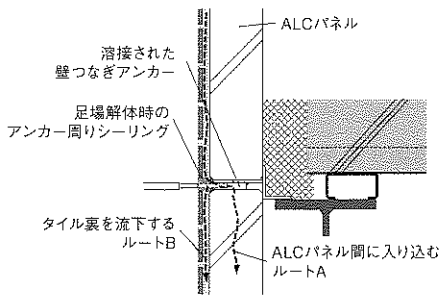


図1 横目地に設置した壁つなぎの合番補修部

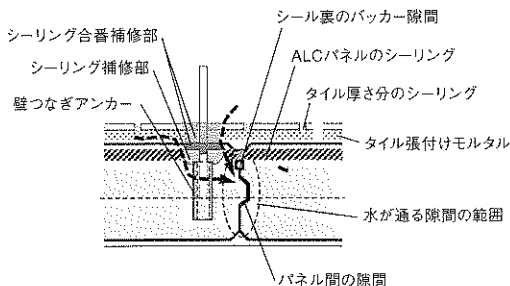


図2 ALCパネル間の漏水ルート